

YokohamArtLife 第2回 YAL ルーム

日時：2020年8月4日（火）

場所：横浜市芸術文化振興財団事務局（産貿センタービル 1階）9階会議室 ビデオ会議

参加者： 【主催団体】 株式会社横浜メディアアド
（順不同・敬称略） NPO 法人ザ・ダークルーム・インターナショナル
NPO 法人ヒューマンフェロウシップ
株式会社スタジオ・ゲンクマガイ（STGK Inc.）
YOKOHAMA AIR ACT 実行委員会
【講師・ファシリテーター】 中村美亜（九州大学大学院芸術工学研究院 准教授）
【事務局】 公益財団法人横浜市芸術文化振興財団 広報・ACY グループ

中村先生キーノートレクチャー 《セオリー評価とアウトカム評価》

★参考資料：文化庁×九州大学共同研究チーム編『評価からみる“社会包摂×文化芸術”ハンドブック』第一章（13p～28p）https://www.bunka.go.jp/tokei_hakusho_shuppan/tokeichosa/pdf/92212901_03.pdf

「セオリー評価」（参考資料 p22）アートプロジェクトをやっている人に一番適していると思われる考え方。普段自分たちがやっていることを言語化することで、「目的」をたて、そこにどのようにして到達するのかを考えることが重要。

目的：自分たちのやりたいこと×公募の趣旨、社会的課題

※公的資金で行われる事業は社会的な意義を言う必要がある。

※自分たちのやりたいことと、社会的意義が合致するところに目的をたてることが重要。

〈セオリー評価〉

：ステップごとに、目的と活動内容が[あっているかチェック](#)

※現実の状況が変わってきたときに、ちゃんと目的にたどり着けるのかということをチェックする。

※これは、習慣化し、いつもちゃんとしていくことが重要になる。

方法：やりたいこと・やるとよいこと×現実

「アウトカム評価」（参考資料 p24）

	即時 (すでに起きた変化)	中期 (現れ始めた変化)	長期 (今後起こりそうな変化)
参加者個人			→
事業に関わった ステークホルダー			
地域コミュニティ	↓		

事業実施中に変化が、起こりつつある、起こっている、起こった後に、ということがあったのかを、時系列で確認し、これが時系列で説明できることが肝要。

しかし！

どんな変化が重要かはやってみないとわからないので、ある程度変化が起こった時点で、振り返って見ていくしかない。いったん何が重要な変化かがわかると、その後は予測もある程度可能になる。

《事例1》(資料 p52,53)

■ 目的が明確な場合の指標の見つけ方

- ・ 活動内容：認知症高齢者に演劇俳優が朗読などを実施
- ・ 評価者：藤井昌彦（東北大学医学部臨床教授、老年医学）
- ・ 目的：認知症の症状（BPSD）を減らすこと
- ・ 予測：演劇の俳優が劇的に朗読をすると、何かしらの効果があるのではないか？
- ・ 経過：試行錯誤の中で、徐々にプログラムがうまくいくようになり、目的に対する効果がある可能性（＝ポイント）が見えてきた。
- ・ ポイント：「高齢者と介護者の関係改善」が鍵になるのではないか。
- ・ 評価：「高齢者と介護者の関係改善」につながる変化を知ることができる指標を策定

「歓喜的情動指数」(各項目につき「程度」と「頻度」を0～3の4件法で採点。90点満点。得点が高い方が有意な変化)

1. 挨拶を返すことができる
2. 表情がある
3. 物事に関心を示す
4. 話合いをしようとする
5. 喜ぶことができる
6. 感謝することができる
7. 賞賛に反応することができる
8. 相手を気遣うことができる
9. ユーモアがある
10. 物事の道理が話せる

《事例2》(資料 p50,51)

- ・ 内容：認知症高齢者の周りに楽器を並べ、即興を楽しむ「音の砂場」
- ・ 評価者：日下菜穂子（同志社女子大学教授、心理学）
- ・ 目的：??（社会包摂の取り組みではあるが、何が鍵になるのかよく分からない）
- ・ 予測：音楽家に話を聞いたら、「目的を持つと、それ以上のものは生まれたいから答えは持ちたくない」という回答⇒さらに尋ねると、砂場の状況（自分で作りたいものを作り、そこに他の人も参加してみんなでその山を作る）ができると良いかもしれないという回答。
- ・ 経過：実際に砂場遊びを観察。次のようなことが見えてきた。
 - ・ 手や頭の動き⇔楽器演奏などの自律的な行動
 - ・ 誰かといっしょにやる協調的な行動をしている。↓砂場の行動を適用した、WSの変遷
- 1. 音楽家が全体をリードしている
- 2. 途中から高齢者の方がビートを刻み、全体をリードし始めた。
- 3. 高齢者の中でビートが交代し、それに合わせていろんな人が音を重ねていく。
- ・ 評価：3層に分けた構造的な評価
 - ・ 3層目：定性的評価 プログラム実施中に起きたことを記録し、2層目で計測された行動のきっかけや原因、結果を分析する。
 - ・ 2層目：プログラム独自の定量的評価 プログラムごとに独自の指標を設定。参加者の心身の変化を計測。

- ・ 1層目：定量的評価 健康状態、外出や交流の頻度、満足感、性格などを計測
- ・ 「1層目と2層目の定量的評価は、エビデンスとして必要かもしれないが、本当は、3層目だけでいいかもしれない。（3層目の評価がしっかりできていれば）これまで、やってきた人たちしかわからなかったことが、**他の人にも伝わるようになる**のではないか」
↑これがしっかりできていれば良い。

☆ YokohamArtLife の各事業も、《事例2》のように外から攻めていって、最終的にどこをみれば一番よくわかるのか（第3者に説明できるのか）というところが説明できていれば良い。

▶ 質疑応答

- ・ 対象やプログラムが多様だった場合、どのように評価していくことができるのか。
⇒対象やプログラムが多様でも、プロジェクトの究極的な目的は1つのはず。上記「セオリー評価」の説明を参照。
- ・ 目的にしようと思うことが多々あって、決めることが難しい。
⇒それでも、それらの上位概念となる「目的」を定めることが必要。立場の異なるステークホルダーで、この「目的」が共有されない限り、評価は一面的で、あまり意味のないものとなる。
- ・ 心理学的評価と社会学的評価どちらもあり、良いとこどりで良いとは思いますが、どうすべきか分からない。
⇒心理学的評価は、どちらかと言うと、個々人の変化を捉えるのが得意、同様に、社会学的評価は、長期的な社会的変化を捉えるのが得意。それぞれに得意分野があると考えてもらったらいいと思う。

▶ ワークシート

ワークシート記入の際の注意事項

☆「理想像」は1つに絞る：アートが好きではない横浜市民にも納得してもらえる言葉で表現する。

（実際には上記「セオリー評価」での「目的」と同じもの）

☆「活動中の変化」：アート活動（表現活動、観賞活動）の最中に目撃（観察）可能なことを書く。